令和４年度は挑戦の年です

病院長　永澤　昌

新年度にあたり、ご挨拶申し上げます。２年以上続いているコロナ禍にあって、三次市のみならず備北圏域の住民の皆さまの健康を担う責任の重さを、益々自覚する毎日です。

令和４年度桜の季節となり、新たに迎えた医療専門職員は 46 名です。内訳は医師 21 名、看護師 23 名、栄養士２名です。４月１日・４日には全体オリエンテーションを行い、当院の存在意義と役割を理解していただいたところです。

さて、今年はいろいろな意味で“挑戦の年”になります。

1. **病院開設 70 周年**

昭和 26 年６月に馬洗川沿いの校舎を譲り受けて、双三中央病院組合立双三中央病院が開設された時は６診療科（内科・小児科・外科・皮膚泌尿器科・耳鼻咽喉科・放射線科)、32 床の小さな病院でした。

昭和 44 年５月に、同じ地にて全面改築し 275 床を有する鉄筋コンクリートの病院となりましたが、その３年後の昭和 47 年７月の豪雨災害では病院もひどい痛手を負いました。７月９日午前９時から 15 日午前９時までの総雨量は三次では 622 ミリに達し、死者・行方不明者 39 人，負傷者 105 人の人的被害のほか，住家の被害 19,208 棟をはじめとして，三次市における農林地・公共施設などの被害総額は約 640 億円に達しました。

この苦い経験から災害に強い病院を目指し、東酒屋地区の現在地に新築移転したのが平成６年９月です。350 床の最新設備を備えた病院になりました。

令和４年４月の標榜診療科は 24 科にまでになり，当院は備北地域のみならず、島根県南、岡山県北をも含めた広域の医療を担う急性期病院として発展し続けています。

秋には、記念行事を行いたいと思っています。院内に作業部会を立ち上げたところです。70 周年にあたり何ができるかは未定ですが、コロナ禍でも行えることをしっかりと行い、市民の皆さまと三次と病院の歴史を共有し、記念する年を喜び合いたいと思います。

2. **病院建て替えのための基礎構想年間**

病院の建て替えを行うことになりました。どのような機能と規模の病院を目指すべきでしょうか？市民の皆さまの意見をお聴きしながら病院の基本的概要を作り上げることから始まります。この秋頃には基本構想ができあがって、花みずき・秋の号にてお披露目したいと存じます。

3. 令和 5 年度での病院機能評価受審の準備年間

当院は、第三者評価を平成 21 年に受けて以来，しばらく受けていません。

新しい病院のあるべき姿としては、設備だけでなく機能や職員意識も見直したいものです。今の標準的な病院の姿はどうあるべきかを見直す機会とし、見つかった取り組むべきことに挑戦することが大切です。

市立病院の性質でしょうか？職員の中には安定志向を求め、挑戦を避ける方がいるのは否めません。脳科学で証明されていることですが、安定志向は脳も気持ちも萎縮させます。安定志向の生活、仕事を続けていると挑戦を否定する気持ちが強くなってきます。さらに、挑戦できなかったことを正当化するために、挑戦する人を攻撃してしまうようになります。どの職場でも思い当たる節があることでしょう。

当院の全職員に挑戦する意識を持ってもらい、来年度の日本病院機能評価機構の第三者評価を受審することとします。